

で燃えた竹も葉が焦げただけの竹もあつたが、屋敷の土塀は崩れ、建物はほとんど土台しか残つていなかった。砲撃を受けた畑は大穴があいてゐた。四ノ筋、五ノ筋、二ノ筋、一ノ筋も同じ状況である。軟らかな土を踏んでいった捨三郎は突如とした棒の列のような竹藪の地面から竹の子が無数に頭を

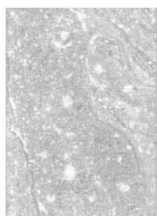
だしてゐるのを見た。
いたるところに小石を載せた饅頭塚があり、いふところから死骸が転がつてゐた。屍臭が濃密にたちこめ、殺気が満ちてゐた。捨三郎は異様な音を聞いてからそのほうに顔を向け、死骸を貪り食う野犬の群を見た。捨三郎は投しようとして石を掴み、その石が饅頭塚の群の上に載つてゐたことに気づいてあわて戻した。捨三郎はと見えないとばかり野犬たちの動きは先程から大胆だった。

捨三郎は同輩たちと四ノ筋から一ノ筋にまで大手門に向かふた。一荒山神社の社殿はなく、小高い丘に焦けて細つた杉が疎らに立つてゐた。城に近づくにつれ、哨兵の姿が目立つた。水のない濠に破砕された大砲車輪が落ち、まわりに死骸が散らばつてゐた。蟬の羽音が耳に絡まつた。大手門は焼け落ち、崩れた石垣が僅かに往時の面影を伝えてゐた。城中か

ふたつの太陽

立松和平

ら運び出したのが衣類と泥とが交じりあい、壊れ



立松和幸

ふたつの

ふたつの太陽

一九八六年十一月一日 初版印刷

一九八六年十一月十日 初版発行

著 者 立松和平

発行者 清水 勝

発行所 株式会社 河出書房新社

東京都渋谷区千駄ヶ谷二―三二―二

電話 四〇四―一二〇一（営業）
四〇四―八六一一（編集）

振替口座（東京）〇―一〇八〇二

印刷 東洋印刷株式会社

製本 小高製本工業株式会社

©1986 Printed in Japan

定価はカバー・帯に表示してあります

落丁・乱丁本はおとりかえします

ISBN4-309-00447-4

著者略歴

一九四七年栃木県宇都宮市に生まれる。早大政経学部卒。

『遠雷』で第二回野間文芸新人賞受賞。一九八五年度若い作家のためのロータス賞受賞。『歓喜の市』、『性的黙示録』など著書多数。

目次

むしろばた
筵旗

5

旅籠屋

35

一粒万倍穂に穂

63

赤貧

87

日光神領獵師隊

125

雨

153

三斗小屋宿

175

熊神

207

あとかぎ

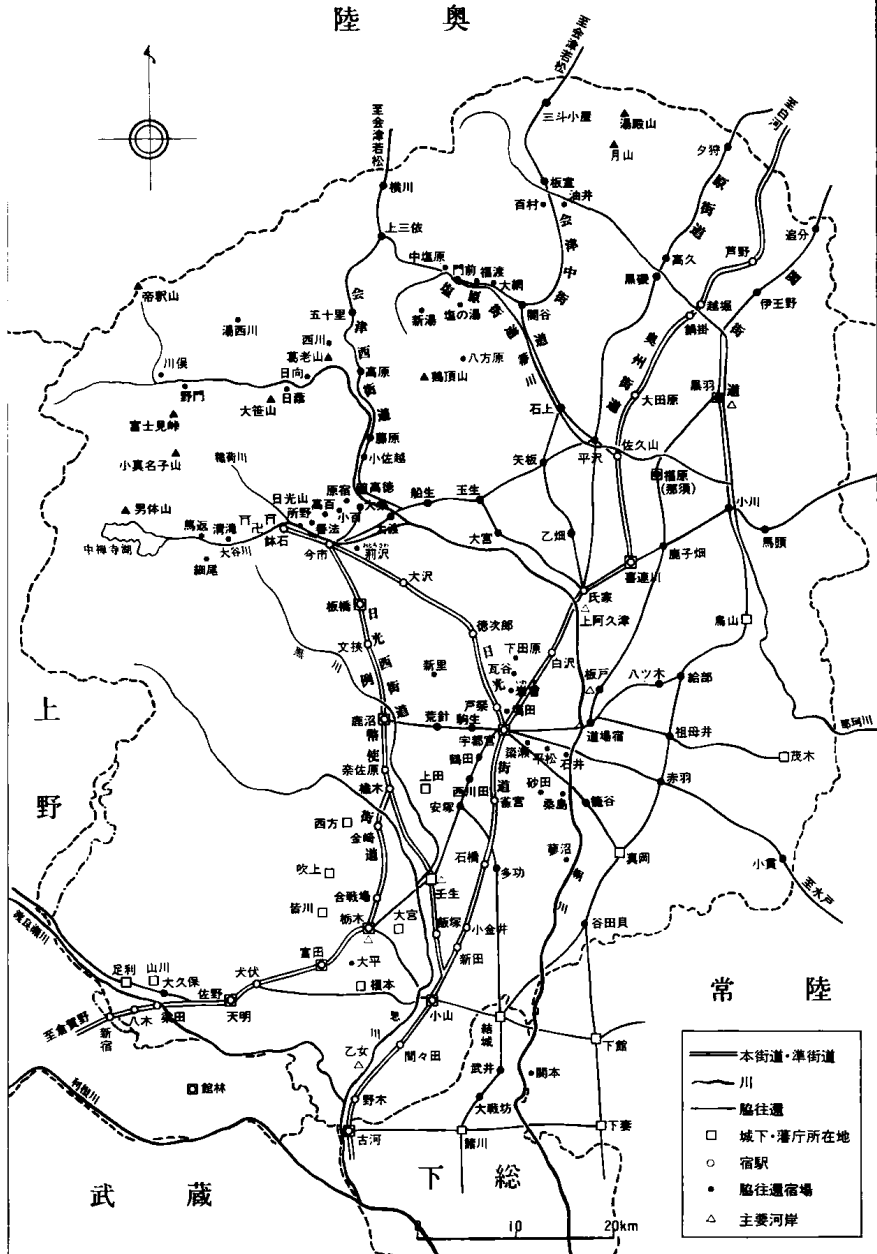
234

装
丁

戸
田
ツ
ト
ム

ふたつの太陽

陸奥



筵むしろ
旗ばた

土はまだ凍っていた。根子灰をたつぷりと振っておいたので、他の田より氷は緩んでいるはずだった。鍬を振上げ、振降ろす瞬間、手首に力を込める。湿った黒い土塊が泥炭のように掘り出された。三、四間進んでから、戻って鍬の背で土塊を碎いた。日差を浴びた土から地中に蚕でもいるように白い糸の湯気が立ち、蒸れた土のにおいが鼻腔に籠った。

道六は鍬を傍に立てて足踏みした。痺れている裸足の足に小便をかけ、鍬を取ってまた耕した。濡れた足に微かに熱が甦ってきた。野面に人影はなかった。今日は雛節句だ。女の節句を口実に、大の男が家で昼間から寝そべっているに違いない。

道楽者の節句働き。陰口が道六の耳にも聞こえる気がした。道六は周囲に目立つよう節句にだけ働いているわけではない。代理で助郷にでたり畑仕事の手伝いをしたり

の賃錢稼ぎができない時に、自分の田の働きをしなければならぬのだ。小作田は二反歩しかないが、水呑百姓の六番目の子供の道六にとっては、村にいられるだけで運がよかった。長兄以外の兄たちはみんな村をでて無宿渡世の宿場人足か馬喰になり、姉妹は宿場旅籠で飯盛女になっていた。

一回目の苗代拵えである。粃を蒔く三日前に二番拵えをする。牛馬がいないので道六は鋤一挺で田仕事をほとんどこなした。雑草も一本ずつ薅めるように抜き、虫は一匹一匹ひねり潰す。馬糞や藁屑が道端に落ちていれば、必ず拾って自分の田に投入れた。二反歩ばかりの田は道六の心を映す鏡だ。うちの田んぼに草が一本でも生えていたらお目にかかりやしよう、というのが道六の口癖だった。

足にちびりちびりと小便をかけては鋤を振りながら、道六は子供の頃の雛節句を思い出していた。草餅が食べれるのが楽しみだった。母はまだ早いというのに、何日も前から子供たちは川の土手にいった。緑の地に白い粉をまぶしたような蓬よもぎの小さな芽が土からでていた。いくら摘んでもはかがいかなかった。家で使わない時は、蓬を街道端のおれんさんの家に持っていくと、焼餅と取換えてくれた。

「持ってきてくれたんかい。お兄ちゃんお姉ちゃんはお地藏さんの生まれかわりだねえ。ありがたいねえ。なんまんだぶ、なんまんだぶ」

おれんさんは念仏を唱えながら焼餅を鉄板の上から取って子供たちの掌に置いてくれた。蓬が少なければ焼餅は半分、多ければ二個もらえた。焼きたての餅は熱くて掌の上で跳ねた。割ると蓬の香が漂った。食べてしまうのが惜しかった。

子供たちにはおいをいつまでも嗅いでいたくて、おれんさんの仕事ぶりを見ていた。おれんさんはうるさがるでもなく子供たちが持ってきた蓬から雑草を摘みだし、箆で水洗いすると、挿鉢で搗りつぶした。そのまま挿鉢に米の粉をいれてよく練り、一個ずつ形を整えて濡れ布巾にならべた。それを炭火の上の鉄板で焼く。通りすがりの旅の人や馬喰が買った。おれんさんの焼餅は安くてうまいと評判だった。

百姓仕事をしないおれんさんは色が白く、指も細くて、瘦せていた。子供の眼にもきれいに見えた。おれんさんは雀宮宿の飯盛女だったのだ。郷村取締役の酒屋が常連になり、旅籠屋の離れを借りて所帯道具を持込み、夫婦気取りで暮らしていた。酒屋の旦那は村方の職務があるといつてはよく村を留守にし、酒屋の暖簾が傾くに違いないと村でも宿でも大評判だった。だが酒屋はおれんさんを身請けしなかった。おれんさんは宿場旅籠の年季が明けても親のいる村には帰らず、この安塚村にやってきて街道の際に藁小屋を建て、焼餅屋をはじめた。酒屋は掌を返して知らぬふりをした。

それから一年もたたないうちにおれんさんは死んだ。女の一人住まいで、物盗りに

播粉木で撲殺されたのだった。おれんさんの小屋は近づく人もいなくなつて台風で倒れ、十年余りも放置され跡形もなくなった。歳月が流れて道六は若い衆になり、酒屋から二反歩の小作地を借りて水吞百姓になった。草餅の季節になると、普段忘れているおれんさんの顔が胸の奥に甦ってきた。この頃では助郷で雀宮宿にいても村のものには酒も女もだすなと布令がまわっていた。

小太鼓、陣太鼓、笛の音が風に乗ってきた。道六は鍬を振る手を止め、野の彼方の街道に眼をやった。新しく盛土したように黒っぽい人の壁ができていた。騎馬隊を先頭に、鼓笛隊、鉄砲隊、駕籠行列、槍隊、諸道具の列がつづいた。道六は人数を数えようとし、列は先頭が見えなくなつてもまだ切れ目がないので、視線を足元の地面に戻した。蹄と人の足音で土は小刻みに震えていた。震えは足の裏を通して道六にも伝わった。軍がはじまるのだろうか。道六は数日前太い丸太を転がすような地響きをたてて大砲が馬二頭に引かれていくのを目撃していた。筒袖のつっぱ着の武士が十人二十人と隊伍を組んで足早に北上するのも見た。道六はそばにいないので、会津藩か庄内藩か白河藩かはわからなかった。

道六は遠くの行列に背中を向け、また足にちよびちよびと小便をかけた。泥が流れて足の皮膚が見えた。今の季節は虫がいないので大助かりだった。田植えをする背中

に虹がとまり、手足や首筋に蚶かざが胡麻でもつけたようにたかった時の気分を思い出し、道六はぶるっと身震いした。小虫にでも血を吸われるのは気味が悪いのだ。ふと眼を上げると、大行列は幻のように野から消えていた。風がでてきた。雲が吹かれてきて、北の方角で鏡のように白く輝いている連山を少しづつ覆い隠した。今年は正月過ぎから風が多かった。冬の空っ風麦の凶作、というが、麦をつくっていない道六には喜ばしいことだった。恐ろしいのは雷様が鳴ることだ。春雷馬うづ鋏きりつるす、と昔からいい、早かんばつ魃で收穫はなく馬鋏に用はなくなる。風ならいくら吹いても結構だ。

千本の銀色の針が天井から壁に突きささっていた。朝靄のために針は揺れて見えた。寝返りを打つと乾いた藁が大袈裟な音をたてて軋んだ。隙間風が染み、天井や壁や床の藁屑が一本一本生きているように動いていた。藁小屋は冬は暖かくて夏は涼しいのだが、風を呼ぶのが欠点だ。台風がくれば家財道具を持って鎮守様の堂に逃げなければならなかった。小屋は風にとばされても一日でつくり直せた。藁の寝床に首まで潜れば湯につかってでもいるかのようにぬくまった。今日は朝食前に庭先の畑のほうれん草と春菊の間引をして、抜いた株を稗粥にいれる。仕事の段取りがまとまると、道

六は藁から起上がった。

戸口に吊した筵をめくって外にでると、銀の粉を撒いたように何もかもが輝いていた。一瞬道六は眼が洗われたような気がした。晴れていても降っていても、小屋から顔をだして朝一番で見る景色が好きだった。正面の一町ばかり先には酒屋の杉の防風林があった。黒い塗塀に囲まれた母家の煙突からは薄汚れた煙が立っていた。

道六は策を傍に置いて地面にしゃがみ、芝のように生え揃っている春菊の芽を根ごと摘んだ。指先で挟むと春菊は堪え性もなく抜けた。小さな根がしっかりと土を噛んでいた。勢いのよさそうな株を一寸間隔に残した。策にたまった春菊は緑の鮮やかさを回復し、強いにおいを放っていた。三畝足らずの猫の額の畑だったが、丹精込めて大根、人参、蕪、隠元と回転するように無駄なく植えていけば、自分で食べる分には余り、宿に運んで小銭が稼げた。畦には田んぼにはいる隙間がないほど稗を蒔く。いつも身体を動かしていれば食べ物は何とかついてまわった。

枯草を踏み折る音で人が近づいてくるのがわかった。長兄の倉蔵だ。道六は二十歳になったばかりだが、倉蔵は四十歳をまわっていた。長兄は前屈みでいつも誰かに追われているような忙しい歩き方をする。長兄が道六の家にくるのは小言をいうためだけだった。道六は長兄をわざと見ないようにして手の動きをいっそうはやめた。

「朝っぱらからはかがいくことだなあ。朝飯前のひと稼ぎけえ」

いつの間にか陽がでていて、長兄の頭の影が手元にかかった。道六は地面に両手をつけたまま土下座するような格好で、へえと口籠った。

「稼ぎすぎて本家より立派な家を建てられたら、俺の顔が立たねえなあ」

「稼ぐってほどじゃねえでやんす」

道六の息が地面から土のにおいを混せて跳返ってきた。

「草一本が百姓の命だから、まあしっかりやってくれや」

「へえ。ありがとやんす」

「おめえのところには誰も相談にこなかんべから、一応耳にいれとかなくちやなんねえと思つてよ。いいか、何があつてもみんながやるようにやれや。一人だけ抜けようなんて金輪際思ふんじゃねえぜや。調子に乗つてやりすぎても後が恐いかなあ。

どっちに転んだつていいようにしとけやあ」

「へえ。わかりやんした」

道六は長兄に早く帰つてもらいたくて同じ姿勢でいった。長兄の藁草履が動きだすのを息を詰めて待った。

「わかつたな」

「へえ」

藁草履は向きを変えて遠ざかっていった。踵が土くれを跳ねあげた。霜の草に足跡が残っていた。足跡と足跡がくっついて濡れたしみのようになったところがひろがってきた。長兄の猫背の後姿は枯草の中に消えた。本家より立派な家かと道六は思った。本家といっても門もなく酒屋とくらべるべくもなかったが、庭には井戸があり、藁屋根の下には藁筵敷きの座敷があり、囲炉裏があり、竈^{かまど}があった。馬も飼っていた。それに嫁がいた。すべてが長兄倉藏のものだった。酒屋の旦那の情で二反歩の土地を小作にだしてもらい、道六が藁小屋を建てて分家の真似事をした時も、長兄には藁屑一本もらったわけではなかった。世話になったのは酒屋の旦那にだ。酒屋の家の細々とした雑事を昔からやっていた老人が田んぼに倒れ泥水にうつぶして死に、その後釜に道六がはいった。藁小屋だけは建て直した。酒屋の家には使用人が多いので、たまに道六が頼まれる仕事は、防風林の枝おろしや落葉かき、裏庭のゴミ穴掘り、屋敷の草むしりくらいだった。酒屋の仕事をすれば、台所の片隅で麦飯に沢庵に味噌汁がふるまわれた。濁酒が湯呑茶碗に一杯でることもあった。酒は飲んでしまるのが惜しくて、道六は茶碗を両手で持っていていつまでも台所にしゃがみ、女中にうるさがられた。

酒のことを考えただけで口の中に唾液がたまってきた。酒屋からはしばらく呼出し